

## 再生復興に挑む!

## 釜石最後の芸者



激動期生き抜き生涯現役  
 — たくさんの人に助けられた —

伊藤艶子さん

大震災で中断していた夏祭り『釜石よ  
 いさ』が復活した昨年9月、踊りの輪の  
 中に粋な浴衣姿で踊る一人の女性に私は  
 夢中でカメラを向けていました。踊りが  
 終わるころ、その女性が釜石最後の芸  
 者、伊藤艶子（つやこ）さんであること  
 を知人から聞かされ、数十年住んでいな  
 がら艶子さんを知らず、釜石に芸者さん  
 がいたことに驚き『釜石最後の芸者』と  
 いう響きに衝撃を受けました。

艶子さんが生きた年代を考えると、度  
 重なる津波、艦砲射撃など、『鉄のまち  
 釜石』の栄枯盛衰を肌で感じ目の当たり  
 にしてきた貴重な体験の持ち主、そんな  
 艶子さんにお話を聞いてみたいという衝  
 動に駆られたのです。

### ▼高女中退し芸者の道

芸者になるきっかけとなったのは13歳の時、地元の高等女学校に入学したものの、間もなく父親が病にかかり、長兄が大学、姉が女学校、次兄も学校に通っていたため、少しでも家計を助けるために艶子さんは好きな踊りで身を立てようと高等女学校を中退し芸者の道に進んだのでした。

釜石の奥座敷とも呼ばれる料亭『幸楼（さいわいろう）』に年季奉公として入り、翌日からお座敷に出て芸者の前座として踊りを披露し可愛がられました。

### ▼上京修行し藤間流名取

順調に芸者の道を歩んでいたものの、日本が戦争へと突き進む中で、17歳の時に幸楼は軍の宿舎となり、女中として働かざるを得なくなりました。終戦直前には2度の艦砲射撃を受け釜石は焼け野原となりました。幸楼も2度目の艦砲射撃で焼けてしまい、軍の工兵がつくった防空壕でしばらく暮らしたものの、芸者の道はいったん閉ざされ実家へと帰されたのでした。

1948年（昭和23）年、釜石の寿司屋へと嫁ぎ、翌年には女兒が誕生しましたが、間もなく離婚。ふたたび「踊りで身をたてよう」と決意し3歳の愛娘を元



### ▼踊り、5歳で弟子入り

事前に取材の依頼をし、艶子さんが住む天神町仮設住宅団地に訪ねると粋な着物姿に身を包み快く私たちを迎え入れてくれました。小柄ながらも背筋をしゃんと伸ばした姿が気丈さを感じさせ、歯切れの良い釜石弁でこれまでの生き様を淡々と語ってくださいました。

年号が昭和に変わる目前の1926（大正15）年12月23日、釜石で司法書士をしていた家庭に2男2女の末っ子として生まれました。踊りが好きで3歳の頃から近所に住む踊りの師匠の稽古場に入りし、5歳で弟子入りしました。



夫のもとに置き上京しました。必ずや娘を引き取ると心に決め、日本橋界隈の天ぷら店に住み込みで働きながら日本舞踊藤間流の師匠のもとに通い、やがて名取りとなって『藤間千雅乃(ちかの)』の名をもらい釜石に戻りました。

### ▼女手ひとつで娘を育てる

釜石に戻ると昼は踊りの師匠、夜は営業を再開した幸楼で芸者としてお座敷をつとめ、女手ひとつで娘を育てあげ大学まで送り出しました。「芸者は頭が悪くてはなれない。お花、お茶、お客さまとおしゃべりも出来なければならぬ、芸事百般、芸者はなんでも出来なければ一流とは言えない」と艶子さん。学校では学べなかつた社会勉強の多くをお座敷で学んだといいます。

『鉄のまち釜石』は不況で合理化を余儀なくされ、溶鉱炉の火が消され最盛期の人口10万人が4万人を切るまでになってしまいました。

### ▼避難所で芸者衆指南

そして東日本大震災。自宅は津波にのまれてしまい、避難所生活の中でショックと疲労から体調を崩し一時は入院しました。それでも避難所に励ましに訪れた東京八王子花街の芸者さんたちへの踊りと三味線の指南で避難所は華や



かな空気に包まれたのでした。津波で流れた三味線も瓦礫の中から見つかって修理、その三味線を携え各地でお披露目をするなどの活躍をしてきました。

### ▼米寿祝いで舞披露へ

仮設住宅の部屋でこの三味線を弾きながら民謡『釜石浜唄』を唄ってくれました。三味線の音色とハリのある歌声にしばし感動に包まれました。

生涯好きな踊りに一生を捧げてきた艶子さんに「これまで再婚など考えませんでしたか？」と同じ女性として気になる質問をしたところ「娘に寂しい思いをさせたくなかった。娘のためにこれまで頑張ってきた」と娘を思う母の顔になつて艶子さんが印象的でした。

昭和の激動期を生き抜き、そして大震災。「これまで苦労はたくさんありましたがたくさんの人に助けられてきました、皆さんのお陰です」とどこまでも謙虚な艶子さんです。

釜石最後の芸者、生涯現役の艶子さん。昭和から平成へと変わりゆく釜石を見つめ続け、生き抜く強さを艶子さんから教わったような気がします。そして、次の世代にこれまでの釜石を語り継ぎ、より良い新しい釜石を再生してほしいと強く思いながら帰路につきました